

巻頭言 「地域学習を進める上で」

教育研究所連絡協議会委員長 平居 智基

市内の各学校で地域の特色を生かした地域学習が進められている。ただ、地域素材をさらに発掘、広げていくことの難しさも感じていた。そんなとき、地域の歴史や文化をまとめた冊子に出合った。勤務している豊川地区には、豊川地域コミュニティ運営協議会があり、「福利」「安全」「文化・歴史」の三部会に分かれて活動している。「文化・歴史」部会では、豊川地区の歴史や文化などをまとめた冊子「道祖神とどんど焼き」(H29 年度発行)・「豊川地区のお祭り」(R 元年度発行)・豊川地区の歴史「温故知新」(H30 年度発行)・「続温故知新」(R3 年度発行)を作成していた。飯泉地区・成田地区・桑原地区の 3 地区が集まる豊川地域の特色や歴史、文化など多くのことを学ぶことができた。地域の方が、自分たちの暮らす歴史や文化などを調べ、まとめ、紹介する活動をしていた。地域の方々の力に驚かされた。冊子を図書室に置くとともに教職員にも紹介した。勤務する学区にゆかりのない教職員では、地域の歴史や文化など知識が不足している事が多い。地域に関する情報の詰まった本があることは地域学習を進める上で有効であり、地域学習を支える基礎になると思えた。今回、豊川地域コミュニティ運営協議会で地域の方と交流することで地域のことを知ることができた。地域学習を広げ、進めていくことは地域の人と交流することが近道にも思えた。

< 研究所便り > 「小田原の自然」活用講座（自然観察会）教育研究所研修相談員 高松 宗

小田原市教育研究所では、年 7 回「自然観察会」を開催しています。これは小学校 4 年生以上に配布していて、令和 6 年度からは各小学校に 1 クラス分を配布している理科副読本「小田原の自然」をもっと活用してもらいたいという願いからスタートしたものです。小田原の各地域を巡って、植物・昆虫・磯の生物・地形・地質・野鳥などを観察しています。自然体験の少ない子どもたちにとっては、路傍の草花は単なる「雑草」であり、空き地の小石も河原の石も「石ころ」です。小さな昆虫の触角をじっくり見ることも、鳥の鳴き声に耳を傾けることもなかった、そんな子どもたちが動植物の名前や特徴を知り、目の前の石の歴史を知った時、目を輝かせ胸躍らせます。子どもたちにとって、年 7 回の自然観察会は自然が育んだ素敵な「宝物」との出会いの時でもあります。

この事業を支えてくれている講師の先生方を紹介します。敬称は略させていただきます。谷 圭司・元千代中学校教諭【地学】、米山 有美・自然観察指導員【植物】、初瀬川 孝夫・元酒匂中学校教頭【鳥】、高橋 由季・酒匂川水系のメダカと生息地を守る会【メダカ】、垂水 宏昌・矢作小学校総括教諭【鳥】、村岡 俊明・国府津中学校総括教諭【地学】、西垣 亮・白山中学校教諭【水生生物】、内野 寿秋・町田小学校教諭【昆虫】。(お名前・肩書【得意分野】となっています。)

令和 6 年度の実施内容を紹介します。第 1 回〔4 月〕平地の自然、第 2 回〔5 月〕海岸の自然、第 3 回〔6 月〕春の野鳥、第 4 回〔7 月〕丘陵の自然、第 5 回〔11 月〕小田原の地形、第 6 回〔12 月〕酒匂川の自然、第 7 回〔1 月〕酒匂川水系の野鳥を行いました。

この自然観察会を通して、小田原の豊かな自然を守り育てていこうと思う市民が一人でも多く育ってくればと強く願っています。

小さなころみ 「共同研究」

教育指導課指導主事 中野 加弥子

児童生徒一人一人が個別最適な学びを充実させる授業づくり

～ICTを必要に応じて個々の学びに生かす～

〈研究員〉◎加賀谷 元（下府中小学校）鈴木 直人（桜井小学校）長澤 孝江（富士見小学校）

○加藤 太一（白山中学校）三廻部 啓輔（泉中学校）

令和5・6年の研究の集大成として、1月28日に公開研究会が開催されました。研究員の皆さんが大切にしてきたことは、「子どもの思考を大切にした単元計画であること」「身に付けたい力をつけること」「学習の過程では、その子にあった学習形態や学習方法が選べ、ICTはその選択肢であること」です。これらの実現に向けて各校で実践を重ね、それらのまとめを発表しました。また桜井小学校6年生で行った公開授業は、子どもの思いを大切にした単元計画のもと、主体的に目標に向かってICTを選択しながら活動に取り組む姿が見られました。研究発表会にお越しいただいた早稲田大学名誉教授小林宏己先生からは、教科の学習と同様にICTの活用について子どもたち一人一人を見取り、どのようにICTと関わるか（関わらないこともあり）、付けたい力は何かを先生が把握していることが大切である（この日はICTの活用にかかる座席表がありました）ことなどをご指導いただきました。この発表が各学校での実践の参考になることを願っています。

研究員の先生方、2年間ありがとうございました。



ある教室から 「プロがプロになるとき」

教育指導課指導主事 石井 悠季

12月に初任者の授業を参観した。「あ、ここにプロがいる」と思った。教室に入ると温かみのある掲示物の数々。『先生との3つの約束』『話す時・聞く時のルール』『思いやりの木』『前時までの学習の流れ』春から積み重ねてきた先生と子どもたちの学びの軌跡が教室全体に張り巡らされていた。もう一つ目にとまったのは、特別支援学級の時間割が通常の学級と並べて掲示してあったことである。先生が何を大切にしているかは、一目瞭然だ。授業の中にも先生の教師としての姿勢が詰まっていた。印象的だったのは、悩んでいる子に寄り添い、できるだけみんなに発言の機会を作ろうと試みていた姿だ。授業の終わりには、「みんなの素晴らしい考えは後で見ますのでノートに貼っておいてください。」と伝えていた。“授業は、子どもが主役”とはこういう言葉がけから子どもに伝わっていくものだ。先生と子どもたちの日々の関わりが垣間見られる瞬間でもあった。

教室を別の角度から眺めてみると、そこにもプロがいた。その授業を温かな眼差しで見つめる学年主任と教務主任、管理職の先生。今回の授業だけでなく、4月から大切に育ててきた先生が立派な姿に成長していく過程を見守っていた。

教師とは、プロフェッショナルな仕事だ。目の前の人を理解し、どうアプローチが必要で、何で勝負していくか、参観している私自身も自分に問う。先生になっただけでプロになるのではない。1年目のプロ。15年目のプロ。25年目のプロ。それぞれに試行錯誤し、見える景色は違うけれど、子どもの成長のために努力していくことこそプロたる所以なのだ。

多様な子どもたちを包摂する柔軟な教育課程を目指していくためには、私たち自身が常に前進しなければならない。そう思わせる授業をしていたプロフェッショナルな教師のみなさんに出会えたことに感謝したい。